



聞き流し



川崎ゆきお

「昨日少し違ったことがあると、今日は少し違うんだ」

「何かありましたか」

「大したことじゃない。自販機でコーヒーを買った程度かな。これはよくあることじゃない」

「しかし、普通によくあることじゃないでしょうか」

「え、どういうことかね」

「竹中さんはコーヒーを殆ど飲まない人だった場合、これはいつもと違いますよね」

「そうだね。しかし私はコーヒーはよく飲む。喫茶店に入ってもコーヒーばかりだ。家でも一リットル入りのが冷蔵庫に入っている」

「じゃ、自販機でコーヒーを買うのは特に変わったことじゃないと思いますが」

「散歩中、喉が渴いてねえ。ついつい買ってしまった。しかしなぜコーヒーなんだろうねえ。喉の渴きには、もっと他の清涼飲料水のほうがいいかもしれない。ソーダもあったよ。スポーツドリンクもね。しかし、なぜかコーヒーなんだ」

「コーヒーが好きだからでしょ」

「好きかどうかは分からんが、自販機の前で選択を迫られたとき、安全なコーヒーを選んでしまう。炭酸飲料でもいいだよ。しかし、得体が知れない。飲み慣れていないからね」

「それで、昨日は自販機でコーヒーを買われ、飲まれたのですね」

「そうだよ」

「それが、違ったことだったのですか。いつもとは」

「そうだ。だから、昨日、少し違ったことがあると、今日も少し違うんだ」

「大きな違いではないと思いますが」

「炭酸飲料を選んだとすれば、かなりの違いなんだけどね。しかし、人には範囲がある。その範囲内でしか動かん。そして、その範囲内での違いが、徐々に影響してくる」

「何でもないことなのに」

「範囲内だからね。特に冒険じゃない」

「そうですねえ。たまに自販機で缶コーヒーを買うのは、冒険じゃないですよ」

「コーヒーがあるのに、炭酸飲料を選んだとすれば、冒険だよ」

「新境地とまでは言えませんが、ちょっと変わったことをした感じですか」

「そういうことは、あまりしない。それに、それをすれば、冒険だと分かる」

「それで、どうして、今日は違うのですか。昨日と」

「それなんだ」

「はい」

「中身が問題じゃないんだ。自販機で買ったことが問題なんだ」

「はあ」

「喉が渴いていて、自販機があったので、買っただけなんですよ」

「単純に言えばそうだが」

「はい」

「今まで散歩中、喉が渴いていても、自販機では買わなかった。ところが買ったんだ。これが問

題なんだ」

「じゃ、今まで我慢して」

「多少の喉の渴きはね。我慢というほどのことじゃない。ただ、私にはないパターンなんだ」

「あ、はい」

「しかし、極めてすんなりと、自販機を探し、コーヒーを買って飲んだ。何のためらいもなくね。ごく自然にね」

「普通ですよ。竹中さん」

「これなんだ。こういう変化が実は効くんだよ」

「はあ？」

「だから、今日の私は、少し違っているんだ」

「よく分かりませんが、竹中さん」

「私にもよく分からん。だから、こういうすんなりさ加減が怖いんだよ」

「それは、どうかと」

「まあ、いい。聞き流せば」

「はい」

「実はそこに含まれているものを、気付くことも大事だ」

「はいはい」

「事実、今日の私は少しだけ違う」

「あ、はい」

了